

感情イメージの研究 (VI)

—感情価とパーソナリティ特性の関連—

上杉 喬・鈴木賢男

Research on the Affective Aspect of Imagery (6th report)

—The Relations Between Affective Values and Personality Traits—

Takashi Uesugi and Masao Suzuki

はじめに

本研究は、『感情イメージの研究』と題する継続的研究の第VI報である。第I報(1981)では、上杉(1979)の開発したイメージ調査法にもとずいて作成した「イメージ調査票」の有効性を、学生生活を取りまく諸対象に対する感情イメージの調査により明らかにし、また、イメージ調査法が、その対象を職場生活や家族関係などに拡張適用する可能性を示した。第II報(1983)は、イメージ調査法を労働場面に適用したもので、イメージする諸対象を労働場面の諸事象とする「労働イメージ調査票」が開発され、人々の抱く労働場面の諸対象(事象)に対する感情イメージの構造が、基本的に学生生活における諸対象におけるもの(第I報)と同じであり、感情イメージの測定可能性とテスト化の可能性を明らかにした。第III報(1983)は、第II報を直接引き継ぐものとして、諸対象に対する感情価を指標とすることにより、感情イメージにおけるプラス感情v.s.マイナス感情を軸として、労働場面の諸対象の構造と連関を把握することの可能性を示し、具体的に感情イメージのレベルで労働場面の諸問題を明らかにする可能性を示した。また、第IV報(1989)では、1982年から1989年の8年間にわたる学生生活を対象とする「イメージ調査票」による結果から、諸対象に共通する感情イメージの構造が一貫した安定性を有すること、さらに、感情イメージの構造がイメージされる対象の種類により、一定の変化を示し、諸対象をプラス感情v.s.マイナス感情の軸上に位置づける指標(測度)としての感情価は、諸対象に共通する重みづけではなく、対象毎の重みづけを用いることの必要性を明らかにした。

本研究(第VI報)は、第IV報にひきつづくもので、基本8感情を用いて学生生活における諸対象の感情イメージを「イメージ調査票」によりとらえ、第IV報で検討された、対象毎の重みづけを用いた感情価により、感情イメージの持つ意味を人格テストとしてのTPIとの関係で明らかにしようとするものである。

本研究における「感情イメージ調査法」の特徴は、対象を指示する語(対象語)を提示して対象をイメージさせ、同時に感情語を提示して感情語によって想起(イメージ)された感情イメー

ジとが、直観的に“ぴったり”であるかどうかを、〈近い—遠い〉の次元で評定するという手続をとることである。その意味では、対象のイメージと感情イメージの照合を通して“ぴったりさ”を直観的に評定するもので、この照合の基礎に、言語の意味場を仮定するものである。

このようにとらえた感情イメージは、現前する対象や事象（出来事）などにより直接に喚起された感情とは異なり、対象語として提示された対象に対するさまざまな過去体験とさまざまな知識との照合（記憶され思考作用を受けて保持されているイメージ）として成立しているものである。すなわち、日常体験を通して対象や事象の感情的意味として慣化され、比較的自動的にイメージとして浮かびやすいものとなっていて、現前する対象に対して生ずる感情にも影響を与えつづける基底的感情（基底的感情イメージ）であると考えることができる。

このように感情イメージをとらえた時、基底的感情としての感情イメージとさまざまな事象に対する基底的な行動特徴としてのパーソナリティとの関連を仮定することが可能となる。例えば、われわれは、希望に満ち、喜びを感じている時には、表情も生き生きとして、明るく活動的になり、社交的にもなる。反対に、悲しみにとらわれている時や恐れ・怒り・嫌悪の気持の強い時には、表情も暗くなり、不快を避けるために閉じ込めりがちになったり、また、攻撃的になったりする。このように感情状態と表出行動との間には一定の対応関係が見られるのであるが、これは、基底的感情としての感情イメージと基底的な行動特徴としてのパーソナリティとの関係にも見られるのであろうか。

目 的

本研究の目的は、感情イメージ調査票により、基底的感情としての感情イメージを、32対象について調査し、基本8感情に基づく対象の感情価の持つ意味を、TPI（東大式パーソナリティ・インベントリー）の診断尺度との相関に基づいて分析し、感情イメージとパーソナリティとの関係を実証的に明らかにすることである。

方 法

1. 感情イメージ調査票

本研究では、上杉（1979）の開発したイメージ調査法に従って、学生生活に関連の深い32の対象語と8つの感情語を組み合わせた感情イメージ調査票を使用した。イメージ調査法は感情イメージの測定のために開発したもので、感情研究としてのSD法と創造性開発技法としてのKJ法（川喜多二郎、1965）からヒントを得たものである。具体的には、表1に示す8感情語と32対象語を組み合わせ、表2のように、対象語（ex.私、父、母など）と感情語（ex.喜、愛、悲など）を対にして示し、対象語の指示する「対象」（各人の体験を通してイメージとして存在している対象）をイメージに浮かべてもらい、その「対象」のイメージと、感情語からイメージされる感情イメージの〈近さ—遠さ〉を、5段階で主観的に評定してもらうものである。本研究の感情イメージ調査における教示は、次の通りである。

次のページから、全部で3ページにわたって、1～256のことばの対があります。左側はいろいろな対象や事象をあらわしていることばです。右側のことばは、感情語です。

表1. 感情語と対象語

(感情語) 8										
喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌			
(対象語) 32										
家族	母	父	家庭	姉妹	生	兄弟	職場	近隣	社会	
仕事	親類	学校	集団	生活	友人	仲間	遊び	趣味	旅	
妻	夫	恋人	私	文化	人類	自然	芸術	病気	死	
健康	勉強									

表2. イメージ調査 (一部)

	近い	やや近い	ど ち ら え な い	やや遠い	遠い
1. 私 - 嫌	_____	_____	_____	_____	_____
2. 芸術 - 恐	_____	_____	_____	_____	_____
3. 死 - 驚	_____	_____	_____	_____	_____
4. 父 - 愛	_____	_____	_____	_____	_____

各対について、左側の対象や事象を具体的にイメージしたとき、あなたにとって右側の感情が、「近いもの」であるか、「遠いもの」であるか、そのびったりするところに○印をつけて下さい。

2. TPI (東大式パーソナリティ・インベントリー)

本研究においては、基底的な行動特徴であるパーソナリティを測定するものとして、既成の質問紙法性格検査のうち、TPI標準版を使用した。TPIは肥田野直ら(1963)により、多面式性格検査目録として知られるMMPIをモデルとして作成され、常用尺度としては、有効性尺度が5尺度、基本尺度が病理法による8尺度と社会性尺度1及び付加尺度が社会的向性尺度1の計15尺度から成り、基本尺度・社会性尺度・社会的向性尺度の10尺度が診断尺度として用いられている。

3. 対象者・実施時期

文教大学人間科学部1年生154名(男子75名、女子79名)。1986年4月、統計学の授業時間中に実施。

手 続

- 32の対象語毎に、8感情語間で被験者154名についての相関行列から、主成分分析の解(固有値1.0以上を基準)を求めた。
- 上記1.の主成分分析の第1因子(対象語「自然」は第2因子)の因子負荷量をウエイトづけとして、32の対象毎に、8感情の合成得点としての“感情価” T_{ij} を求めた。 T_{ij} は対象 j に対する被験者 i の感情価で、 $T_{ij} = (\sum W_{jk} \times t_{ijk}) \div \sum |W_{jk}| \times 10$ として定義される。ここで、 W_{jk} は対象 j に対する感情 k のウエイトづけであり、32の対象毎の8感情についての主成分分析第1因子

〔自然〕では第2因子)の因子負荷量(表3の右欄)である。t_{ijk}は被験者iが対象jをイメージして感情kとの<近さ-遠さ>を評定した評定点で、「近い」= +2、「やや近い」= +1、「どちらともいえない」= 0、「やや遠い」= -1、「遠い」= -2として数量化したものである。「感情価」は+20 ~ -20に分布する。

3. 被験者154名の対象毎に求められた“感情価”によって、32の対象間の相関行列から、主成分分析の固有値及び累積寄与率を手がかりに、4~7の回転バリマックス解を求めた。

4. 上記3により求めた7因子を構成する対象の合成得点(感情価の合計点)及び32対象毎の感情価とTPI診断尺度得点との間の相関係数(ピアソンの積率相関係数)を求めた。

結 果

1. 32対象毎の8感情についての因子分析

表3は、対象毎に求めた8感情の因子分析(主成分分析)の結果で、第1因子の因子負荷量を示したものである。「自然」を除く、31対象において、第1因子がプラス(ポジティブ)感情(喜・望・愛)とマイナス(ネガティブ)感情(悲・恐・怒・嫌)の対極性を代表する因子であった。なお、「自然」の場合には、プラスv.s.マイナス感情を代表する因子は第2因子であったので、表3には第2因子の因子負荷量を示した。この第1因子(〔自然〕では第2因子)の因子負荷量は、多くの対象において、「喜」が強いプラス感情を示し、「嫌」が強いマイナス感情を示すものであったが、対象により、8感情のプラスv.s.マイナス(ポジティブv.s.ネガティブ)軸上の意味、すなわちプラスv.s.マイナス感情の強さが変化することも示されている。

対象によるプラスv.s.マイナス感情の強さの変化は、「驚」において顕著で、対象が「私・父・仲間・家族・学校・職場・人類・文化・仕事・遊び・生活・芸術・旅・生・自然・趣味」では、因子負荷量は-0.2 ~ +0.2を示し、「母・兄弟・姉妹・恋人・家庭・社会・勉強」では-0.2 ~ -0.4の中程度の値で、「夫・妻・友人・親類・集団・近隣・健康・病氣・死」では、0.4以上の高い負荷量を示すものであった。

2. 32対象の感情価

表3の右欄は、表3の左欄の対象毎の因子負荷量(〔自然〕では第2因子、その他の31対象では第1因子)をウェイトづけとして用いた、対象毎の感情価の平均値及び標準偏差を示したものである。ここで理論値は、+20 ~ -20であり、+20に近づけば被験者の対象に対するプラス感情が強く、-20に近づけば、マイナス感情が強いことを示す。

結果は、強いプラス(ポジティブ)感情としてイメージされている対象は、順に、「健康」「旅」「遊び」「趣味」(11.00以上)であり、次いで「家庭」「家族」「恋人」「友人」「仲間」(10.00以上)であった。反対に強いマイナス(ネガティブ)感情としてイメージされているものは、「病氣」「死」(-8.00以下)であった。また「社会」「勉強」「集団」(2.00以下)に対する感情イメージは、マイナス(ネガティブ)ではないとしても、明確にプラスとはいえず、相対的にマイナス方向のものであった。「私」(3.21)イメージと「父」(3.89)イメージもマイナスではないが明確にプラス感情とは言えないものである。「父」(3.89)イメージは「母」(9.71)イメージに比べ、有意にマイナス方向のものであった。

表3. 主成分分析結果と感情価

	第1因子因子負荷量（「自然」は第2因子）								感情価	
	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌	平均値	標準偏差
1 家族	-0.76	-0.69	-0.81	0.02	0.68	0.52	0.61	0.71	10.69	7.071
2 母	-0.68	-0.60	-0.77	0.25	0.49	0.50	0.59	0.70	9.71	6.414
3 父	0.79	0.64	0.74	-0.10	-0.47	-0.24	-0.44	-0.83	3.89	7.824
4 家庭	-0.72	-0.54	-0.73	0.30	0.68	0.74	0.65	0.78	10.92	6.831
5 姉妹	-0.68	-0.45	-0.69	0.32	0.66	0.70	0.65	0.72	9.05	6.455
6 生	0.81	0.76	0.64	0.17	-0.55	-0.39	-0.38	-0.72	9.17	6.603
7 兄弟	-0.72	-0.50	-0.60	0.21	0.59	0.40	0.67	0.74	9.41	6.296
8 職場	-0.70	-0.51	-0.54	0.14	0.82	0.69	0.70	0.79	4.30	7.555
9 近隣	-0.49	-0.34	-0.55	0.43	0.70	0.70	0.83	0.78	5.61	6.904
10 社会	-0.54	-0.56	-0.51	0.23	0.72	0.65	0.72	0.80	0.14	7.676
11 仕事	-0.62	-0.55	-0.35	0.10	0.76	0.63	0.67	0.78	5.22	7.083
12 親類	-0.63	-0.55	-0.73	0.51	0.51	0.81	0.67	0.83	5.63	6.789
13 学校	-0.78	-0.71	-0.64	0.19	0.70	0.63	0.57	0.76	5.61	7.596
14 集団	-0.62	-0.51	-0.66	0.50	0.67	0.70	0.69	0.79	1.39	7.897
15 生活	-0.67	-0.54	-0.40	0.09	0.79	0.73	0.56	0.64	7.23	6.530
16 友人	-0.66	-0.62	-0.28	0.45	0.73	0.79	0.60	0.73	10.43	6.353
17 仲間	-0.77	-0.70	-0.68	-0.04	0.56	0.55	0.59	0.79	10.26	6.550
18 遊び	-0.77	-0.57	-0.40	-0.08	0.74	0.68	0.73	0.77	12.09	6.215
19 趣味	-0.66	-0.52	-0.20	0.16	0.80	0.77	0.78	0.54	12.72	5.969
20 旅	-0.64	-0.73	-0.47	-0.13	0.48	0.50	0.63	0.75	11.29	5.938
21 妻	-0.22	-0.25	-0.28	0.51	0.81	0.68	0.77	0.83	9.89	6.671
22 夫	-0.41	-0.30	-0.47	0.55	0.77	0.66	0.77	0.78	9.28	6.519
23 恋人	-0.52	-0.61	-0.45	0.30	0.66	0.67	0.63	0.74	10.47	6.156
24 私	-0.67	-0.49	-0.42	0.08	0.68	0.67	0.58	0.75	3.21	7.278
25 文化	-0.59	-0.52	-0.47	-0.05	0.76	0.68	0.59	0.72	6.42	7.332
26 人類	-0.63	-0.59	-0.57	0.16	0.66	0.63	0.71	0.83	4.67	7.972
27 自然	-0.64	-0.59	-0.53	0.08	0.53	0.51	0.44	0.59	7.65	5.806
28 芸術	-0.62	-0.66	-0.47	-0.02	0.52	0.64	0.49	0.72	9.87	6.104
29 病気	-0.74	-0.59	-0.32	0.43	0.43	0.68	0.40	0.56	-9.85	6.286
30 死	-0.67	-0.70	-0.45	0.51	0.74	0.78	0.25	0.81	-8.68	8.184
31 健康	-0.63	-0.44	-0.09	0.45	0.69	0.62	0.47	0.59	13.47	5.267
32 勉強	-0.79	-0.75	-0.64	-0.22	0.68	0.60	0.48	0.79	0.84	7.713

3. 感情価を指標とする32対象の因子構造

表4は、感情価を指標とした32対象の因子分析バリマックス解の結果である。主成分分析における固有値1.0を基準とする解は4因子性で累積寄与率は63.2%であったが、そのバリマックス解はやや解釈のしにくさが残ったため、因子数を5、6、7とする解を求め検討した結果、7因子

(主成分分析における固有値0.923、累積寄与率72.214%)による解が、単純構造を満たし、解釈しやすいことから、決めたものである。

その結果、第1因子は“家族関係”の因子と呼べるもので、「家族・母・父・家庭・姉妹・生・兄弟」の7対象から構成されるものであった。第2因子は“社会関係”の因子で「職場・近隣・社会・仕事・親類・学校・集団・生活」の8対象から成るものであった。第3因子は“交遊

表4. 因子分析 (varimax解)

対象語	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
1 家族	0.82	0.24	0.20	0.17	0.11	0.17	0.10
2 母	0.80	0.12	0.16	0.24	0.11	0.16	0.13
3 父	0.78	0.12	-0.02	0.08	0.15	0.05	0.04
4 家庭	0.76	0.20	0.19	0.27	0.24	0.23	-0.03
5 姉妹	0.64	0.21	0.30	0.30	-0.01	0.25	0.12
6 生	0.56	0.25	0.38	0.03	0.35	0.21	0.06
7 兄弟	0.55	0.30	0.30	0.25	0.06	0.12	-0.01
8 職場	0.15	0.73	0.16	0.21	0.14	0.00	0.45
9 近隣	0.19	0.72	0.14	0.26	0.04	0.16	-0.08
10 社会	0.20	0.71	0.17	0.09	0.32	0.06	0.14
11 仕事	0.16	0.65	0.27	0.27	0.12	0.11	0.47
12 親類	0.38	0.64	0.31	0.20	0.12	0.07	-0.03
13 学校	0.16	0.58	0.36	-0.10	0.20	0.06	0.41
14 集団	0.40	0.52	0.40	0.03	0.30	0.01	-0.03
15 生活	0.39	0.46	0.40	0.18	0.42	0.16	0.13
16 友人	0.21	0.31	0.73	0.34	0.05	0.06	0.11
17 仲間	0.34	0.40	0.71	0.16	0.17	0.07	0.10
18 遊び	0.13	0.26	0.65	0.03	0.27	0.19	0.10
19 趣味	0.23	0.08	0.65	0.34	0.18	0.25	0.22
20 旅	0.16	0.38	0.51	0.16	0.30	-0.14	0.11
21 妻	0.33	0.22	0.13	0.78	0.20	0.02	0.07
22 夫	0.31	0.16	0.20	0.74	0.24	0.08	0.06
23 恋人	0.30	0.32	0.32	0.55	0.03	0.10	0.05
24 私	0.34	0.32	0.13	0.06	0.62	-0.07	0.21
25 文化	0.23	0.32	0.23	0.25	0.56	0.34	0.11
26 人類	0.20	0.53	0.20	0.25	0.55	0.23	0.03
27 自然	0.16	0.08	0.45	0.37	0.52	0.10	-0.02
28 芸術	0.03	0.12	0.34	0.36	0.47	0.10	0.30
29 病気	-0.21	-0.07	-0.04	-0.08	-0.03	-0.84	0.01
30 死	-0.36	-0.09	-0.17	0.02	-0.19	-0.67	0.20
31 健康	0.12	0.12	0.42	0.40	0.05	0.46	0.16
32 勉強	0.09	0.15	0.14	0.08	0.13	-0.11	0.84

関係”の因子で「友人・仲間・遊び・趣味・旅」の5対象から成り、第4因子は“愛情関係”の因子で「妻・夫・恋人」の3対象から成るものであった。第5因子は“文化・自然”の因子で「私・文化・人類・自然・芸術」の5対象、第6因子は“健康性”の因子で「病気・死・健康」の3対象から成り、第7因子は「勉強」の1対象であるが、「仕事・職場・学校」の因子負荷量も高い(0.473～0.412)ことから“課題実行”因子と命名することとした。

4. 対象に対する感情価とTPI診断尺度との関係

表5の上段欄は、上記3に求められた7因子を構成する対象の感情価の合計得点を各因子の尺度得点とし、TPI診断尺度との相関係数を求めたものである。

相関係数±0.35以上(関与率12.25%)を基準にこれらの結果を見ると、上段の7因子では、相対的に相関が高く多くの診断尺度との間に相関を示すものは、F2(社会関係)で、Ep(相関係数-0.43)、In(-0.42)、Dp(-0.41)、Hc(-0.41)の4尺度との間に一定水準の相関があった。また、F5(文化・自然)はHc(-0.35)及びHy(-0.35)との間に、F3(交遊関係)はHc(-0.38)、F2(家族関係)もHc(-0.35)との間に一定の相関を示した。これらに比べ、F7(課題実行)はInとの間に-0.34の相関を示すにとどまり、F6(健康性)とF4(愛情関係)は、診断尺度との間に一定水準以上の相関は見られなかった。

また、表5の下段欄は、32対象毎に各対象の感情価とTPI診断尺度得点との相関を求めたものである。各因子毎に見ると、

F1(家族関係)では、「家族」がHc(-0.35)、Hy(-0.35)と、「生」はHc(-0.35)との間に一定水準の有意な相関を示した。

F2(社会関係)では、「職場」がDp(-0.37)、Ep(-0.37)、In(-0.41)とに、「社会」はDp(-0.40)、Ep(-0.36)と、「仕事」はHc(-0.38)、Ep(-0.36)と、「学校」はDp(-0.49)、Hc(-0.43)、Ep(-0.35)、In(-0.47)との間に、「集団」はHc(-0.37)、「生活」ではDp(-0.35)、Hc(-0.37)、Hy(-0.37)、Ep(-0.35)との間に一定水準の有意な相関を示した。

F3(交遊関係)では、「仲間」がDp(-0.35)、Hc(-0.39)、In(-0.35)と、「旅」はIn(-0.40)との間に一定の相関を示した。

F4(愛情関係)では、「妻」「夫」「恋人」のいずれも、診断尺度との間に一定以上の相関は見られなかった。

F5(文化・自然)では、「私」がDp(-0.44)、Hc(-0.40)、Hy(-0.35)、Ep(-0.38)、In(-0.45)との間に一定の有意な相関を示したが「文化」「人類」「自然」「芸術」は、診断尺度と基準(±0.35)以上の相関を示すものはなかった。

F6(健康性)については、「病気」においてMa(0.23)と有意であるが低い相関を示したのみで、「死」及び「健康」では、診断尺度との間に相関は見られなかった。

F7(課題実行)では「勉強」は、In(-0.34)とに相関が見られた。

考 察

1. 8感情の相対的な位置

イメージ調査法(上杉、1979)を用いた感情イメージ研究において、8つの感情が、諸対象に共通して、“強いプラス感情(喜・望・愛)”、“マイナス寄りの中性感情(驚)”、及び“強いマイ

表5. TPI尺度との相関

	Dp	Hc	Hy	Ob	Pa	Hb	As	Ep	Ma	In
F1 家族関係	-0.23	-0.35	-0.34	-0.19	0.05	-0.29	-0.24	-0.21	-0.20	-0.09
F2 社会関係	-0.41	-0.41	-0.33	-0.34	0.11	-0.32	-0.24	-0.43	0.06	-0.42
F3 交遊関係	-0.32	-0.38	-0.31	-0.29	0.14	-0.23	-0.24	-0.28	0.00	-0.34
F4 愛情関係	-0.13	-0.20	-0.20	-0.06	0.10	-0.07	-0.15	-0.16	-0.07	-0.16
F5 自然文化	-0.34	-0.35	-0.35	-0.30	0.09	-0.27	-0.17	-0.33	0.05	-0.32
F6 健康性	-0.11	-0.13	-0.17	-0.03	-0.09	-0.19	-0.11	-0.09	-0.23	0.11
F7 課題実行	-0.30	-0.20	-0.20	-0.28	0.07	-0.21	-0.27	-0.24	0.11	-0.34
1 家族	-0.23	-0.35	-0.35	-0.21	0.03	-0.31	-0.32	-0.22	-0.22	-0.07
2 母	-0.26	-0.28	-0.32	-0.10	0.01	-0.28	-0.23	-0.18	-0.14	-0.05
3 父	-0.23	-0.26	-0.22	-0.16	0.03	-0.25	-0.23	-0.15	-0.15	-0.10
4 家庭	-0.19	-0.29	-0.32	-0.16	-0.01	-0.28	-0.26	-0.15	-0.22	-0.03
5 姉妹	-0.10	-0.19	-0.22	-0.13	0.14	-0.16	-0.17	-0.13	-0.13	-0.13
6 生	-0.32	-0.35	-0.29	-0.24	0.08	-0.28	-0.24	-0.27	-0.01	-0.20
7 兄弟	-0.15	-0.23	-0.17	-0.16	0.11	-0.16	-0.11	-0.22	-0.06	-0.15
8 職場	-0.37	-0.33	-0.19	-0.30	0.12	-0.29	-0.21	-0.37	0.05	-0.41
9 近隣	-0.25	-0.27	-0.25	-0.28	0.07	-0.18	-0.22	-0.30	-0.01	-0.26
10 社会	-0.40	-0.34	-0.24	-0.31	0.13	-0.30	-0.18	-0.36	0.01	-0.33
11 仕事	-0.32	-0.38	-0.28	-0.27	0.15	-0.26	-0.21	-0.36	0.08	-0.34
12 親類	-0.25	-0.32	-0.26	-0.20	0.06	-0.25	-0.21	-0.26	0.02	-0.26
13 学校	-0.49	-0.43	-0.28	-0.34	0.08	-0.23	-0.24	-0.35	0.13	-0.47
14 集団	-0.29	-0.37	-0.29	-0.24	0.09	-0.22	-0.22	-0.29	-0.03	-0.30
15 生活	-0.35	-0.37	-0.37	-0.28	0.07	-0.27	-0.22	-0.35	0.01	-0.29
16 友人	-0.20	-0.29	-0.21	-0.20	0.17	-0.14	-0.15	-0.23	-0.04	-0.27
17 仲間	-0.35	-0.39	-0.30	-0.29	0.21	-0.18	-0.20	-0.28	0.05	-0.35
18 遊び	-0.24	-0.34	-0.27	-0.32	-0.01	-0.24	-0.19	-0.29	-0.01	-0.30
19 趣味	-0.15	-0.22	-0.20	-0.12	0.06	-0.14	-0.22	-0.14	-0.15	-0.08
20 旅	-0.33	-0.24	-0.19	-0.22	0.18	-0.18	-0.19	-0.19	0.17	-0.40
21 妻	-0.16	-0.19	-0.20	-0.05	0.15	-0.04	-0.12	-0.13	-0.07	-0.11
22 夫	-0.10	-0.18	-0.23	-0.06	0.07	-0.08	-0.13	-0.14	-0.06	-0.16
23 恋人	-0.08	-0.20	-0.12	-0.05	0.03	-0.10	-0.15	-0.14	-0.10	-0.17
24 私	-0.44	-0.40	-0.35	-0.33	0.12	-0.25	-0.25	-0.38	0.11	-0.45
25 文化	-0.18	-0.22	-0.28	-0.20	-0.02	-0.25	-0.20	-0.25	-0.07	-0.14
26 人類	-0.34	-0.31	-0.26	-0.27	0.03	-0.24	-0.04	-0.27	0.05	-0.23
27 自然	-0.19	-0.17	-0.18	-0.10	0.10	-0.08	-0.08	-0.12	0.02	-0.15
28 芸術	-0.12	-0.23	-0.27	-0.19	0.09	-0.19	-0.11	-0.21	0.04	-0.22
29 病気	0.08	0.13	0.18	0.01	0.12	0.21	0.09	0.01	0.23	-0.15
30 死	0.08	0.11	0.12	0.01	0.09	0.11	0.03	0.05	0.17	-0.06
31 健康	-0.09	-0.05	-0.14	-0.07	0.06	-0.15	-0.13	-0.16	-0.16	0.00
32 勉強	-0.30	-0.20	-0.20	-0.28	0.07	-0.21	-0.27	-0.24	0.11	-0.34

ナス感情（悲・恐・怒・嫌）”に区別されることが第Ⅰ報（1981）、第Ⅱ報（1983）、第Ⅲ報（1983）、第Ⅳ報（1989）において一貫して示され、また、8感情についての因子分析の主成分分析第1因子に示される因子負荷量は、感情の性質としてのプラスv.s.マイナス（ポジティブv.s.ネガティブ）を軸とする因子との相関をあらわしているという意味から、8感情が、感情のプラスv.s.マイナスの強さにおいて、相対的な違いを持つ事もまた示されて来た。

このことから第Ⅰ報においては、被験者が対象に対して、どのような感情イメージを抱いているかの測度を、諸対象に共通するものとして求めた主成分分析の第1因子の因子負荷量を、プラスv.s.マイナス感情のウエイトづけとして用い、対象に対する感情価とした。

しかしながら、第Ⅳ報において検討したように、8感情のプラスv.s.マイナス軸上における相対的位置は、諸対象に共通するところも少なくないが、対象により変化するものであることも示された。本研究（第Ⅵ報）の結果もまた、第Ⅳ報と同様に、対象に対し、被験者がどのような感情を抱いているかを、プラスv.s.マイナス（ポジティブv.s.ネガティブ）感情の軸上でとらえようとする場合には、諸感情全体に共通するウエイトづけではなく、対象毎に8感情のウエイトづけを変化させる必要のあることを示すものであった。

2. 諸対象に対する感情価

諸対象に対して、被験者がプラスv.s.マイナス感情の軸において、どのような感情を抱いているかをあらわす感情価は、理論的には、+20～-20の範囲で示される。より具体的には、被験者のある対象に対する感情価が+20に近いならば、その対象に対し喜・望・愛などの感情を抱き、悲・恐・怒・嫌の感情とは、無縁（抱かない）であることを示すものである。逆に、-20に近いならば、その対象に対し喜・望・愛などの感情を抱くことがなく、悲・恐・怒・嫌などの感情を抱いていることになる。

結果は、本研究の被験者（文教大学1年生）が、「健康」「趣味」「遊び」「旅」などにプラス（ポジティブ）感情を強く抱き、「病気」「死」などに対しマイナス（ネガティブ）感情を抱いていることを示すものであった。これらは、大学生である本研究の被験者の実態と一致するもので、対象に対する感情イメージを感情価によって測定できることを示すものであった。

3. 諸対象の構造

感情価を指標とする諸対象の因子分析の結果は、これらの諸対象が、感情価（対象に対するプラスv.s.マイナス感情のイメージの強さ弱さ）を軸として、“家族関係”、“社会関係”、“交遊関係”、“愛情関係”、“文化・自然”、“健康性”及び“課題実行”などの7つの事象に区分されることを示した。区分された各グループ内の対象は感情イメージ的に類似したものと考えることができる。

4. 感情価（感情イメージ）とパーソナリティの関連

感情価を指標とする対象に対する感情イメージは、現前する対象や事象（出来事）などによって直接に喚起された感情とは異なって、対象語として提示された対象に対するさまざまな過去体験とさまざまな知識との統合として成立しているものであり、その意味では現前する対象に対して生ずる感情にも影響を与えつづける基底的感情（基底的感情イメージ）と考えることができる。

一般に、感情体験や感情イメージにおいて、プラス（ポジティブ）感情を抱く対象に対しては、

その対象に近づいたり、積極的に働きかけたり、その対象に同一化しようとしたりする。反対に、マイナス（ネガティブ）感情を抱く対象に対しては、その対象を避けようとしたり、消極的になったり、その対象や事象の受け入れを拒んだりしがちである。

また、一般に、社会生活においては、多くの人の好むことを好み、人が嫌うことを嫌うことも感情生活の安定にとっては重要である。

これらのことは、感情価であらわされるわれわれの感情イメージとわれわれの対象に対する行動、さらには、行動特徴としてのパーソナリティとが関連し合うことを予想させる。本研究の結果は、表5の相関係数の示すように、このことを具体的に明らかにした。

まず第1に、諸対象に対する感情イメージが行動特徴としてのさまざまなパーソナリティ特性と関連し合っていることである。その中で、相対的に多くのパーソナリティ尺度と関連を持つのは、“社会関係”の諸対象で、特に「学校」に対する感情イメージ（感情価）は多くのパーソナリティ特性と関連し合っていることが分かる。ここで、「学校」と相関のかなり高いDp、In、Hcは、それぞれ、抑うつ傾向（depression）、内向性（introversion）、心気症傾向（hypochondria）の尺度であり、「学校」に対してプラスの感情イメージを抱く学生は“積極的、社会的、意志的、陽気、活発、自己確信的、情緒安定、”などを特徴とし、反対にマイナスの感情イメージの学生は“抑鬱的気分、悲観的、弱気、消極、控え目、非社交性、心配強迫、陰気、ねくら、能動性の減退、不精、根気ない”などを特徴とする。この傾向は、「社会」「職場」及び「仕事」に対する感情イメージについても、また、“文化・自然”に区分された「私」に対する感情イメージも同様で、「学校」及び「私」に対してどのような感情イメージを抱くかが、重要なことも示された。

また、第2には、その関連は、対象の種類によって、一様でなく、特定の対象に対する感情イメージが特定のパーソナリティ特性と関連していることである。

そして第3には、TPI診断尺度の中でOb、Pa、Hb、Asの4尺度は、少なくとも、本研究の32対象に対する感情イメージとは一部、低い相関を示すことがあるだけで、ほとんどは無相関を示し、関連性を持たないことである。

なお、本研究において明らかになった感情イメージ（感情価）とパーソナリティ特性に一定の関連が見られることは、感情イメージ調査が、基底的感情を把える心理テストへの発展が可能なことを示唆すると考えられる。今後は、テスト化の可能性を課題としたい。

文献

- 肥田野直ほか 1964 東大版総合性格検査（TPI）の作成 日本心理学会第28回大会発表論文集 p.358-362
- 肥田野直 TPIテストの内容と実施について 学校保健研究 vol.9.No1 p.2-7
- 上杉喬・佐々木正宏 カード式投影法による感情因子の基礎研究（体験と意識に関する総合研究第1集 14~20）1979
- 上杉喬 感情イメージの研究 人間科学研究第3号22-38 1981
- 上杉喬 感情イメージの研究（Ⅱ）——労働場面における感情イメージ—— 人間科学研究第4号別冊 29-40 1983
- 上杉喬 感情イメージの研究（Ⅲ）——労働場面における感情イメージの諸連関—— 人間科学研究第5号11-20 1984
- 上杉喬 感情イメージの研究（Ⅳ）——対象による違いと性による違い—— 人間科学研究第11号1-11 1989

